

オオカンガルーのウォークスルー型展示において 展示時間の変更が個体の利用場所選取に与える影響

柴田枝梨

当園は、2016年にオオカンガルーの展示場をウォークスルー（以降 WT）方式に改修した。展示個体の半数以上は改修以降の繁殖個体となり環境に馴化した個体が増えたものの、WT 開放時間は獣舎側に留まる個体が多くを占め、行動量の減少や広がった展示場を十分に活用出来ていないという問題があった。そのため、本種の活動時間に合わせた行動エリアの拡充・滞在場所の分散を目的として、開放時間を縮小し開園時間の後半に閉鎖時間を設けた。

閉鎖時間拡充の効果測定として、個体による利用場所選取の差の有無、通行者数とカンガルーの利用場所の関係を明らかにするため、2023年3月から2024年4月までWT 展示個体20～23頭を対象に行動調査を行った。通行者数と展示場内の通路で隔てた園路側/獣舎側に滞在する個体を識別/カウントした。調査期間中は、連続した閉鎖期間を設けた開園日 A、間に開放時間を挟んだ開園日 B、休園日や強風により終日閉鎖とした休園中止日 C と3種類の閉鎖スケジュールによる行動変化を比較した。

この結果、WT 開放/閉鎖スケジュールに関係なく、獣舎側の滞在個体は多い傾向にあった。しかし、閉鎖条件によって園路側の滞在が増加する個体やどちらのエリアも平均的に利用する個体が一定数いたことから、群れで行動することが多い本種でも、滞在エリアの選取には個体差が見られることが分かった。14時以降園路側を選択する個体が複数いたことから、エリア間の移動は当初の目的である行動量の増加に直結し、獣舎側エリアの個体密度の低下や個体間の衝突の減少、同一エリア内においても滞在場所の選択肢増加などの効果もあったと推察され、滞在エリアに限らず全展示個体の動物福祉向上にも有効であったと考えられる。さらに、連続した閉鎖時間は、園路側への滞在を誘引する可能性があり、閉鎖後の園路側の利用や行動を増やすことによる展示効果確保にも有効と考えられる。これらのことから、WT 閉鎖時間の拡大は、行動量の増加・滞在場所の分散による動物福祉の向上、行動バリエーションが増えることでの展示効果向上・来園者の本種への理解の深まりに効果があることが示唆された。